

第41回 新型コロナウイルスとウガンダ（その2）

新型コロナウイルスの感染は、日本では5月25日に全国的に緊急事態宣言が解除されましたが、常に感染するリスクを考えながらの「新しい生活」形態へと慎重な一歩を踏み出したところと言ってよいでしょう。世界的にみましても東南アジアや欧州を中心に少しずつ規制を緩和する動きが見える一方、ラテン・アメリカではコロナはまだまだ猛威を振っています。

さて、ウガンダですが、基本的にロックダウンの姿勢を維持しつつ、国内的に緩和に向けた動きが見られます。ウガンダ政府が外国との動きを3月下旬と早めに止めたおかげで、国内要因での感染者を出さずに来ております。しかし、4月10日の時点での累積感染者数が53名であったのが、6月18日現在で741名にまで増えております。感染者の増大は、5月後半ではそのほとんどが近隣諸国との間で貨物を運んでいるトラックの運転手又は感染した運転手と接触した者でした。トラック運転手を国境で検査して感染者を国内に入れないことが非常に重要になっています。そのため国境で運転手が長く留め置かれるという事態にもなって近隣諸国との間で調整する必要が出てきております。しかし、6月に入ってからは国内の感染者あるいは感染した可能性のある人と接触した人が感染したり、医療従事者にも感染がでていることが報道されておまして、予断は許さないところです。それにしても新型コロナウイルス感染による死亡者が6月18日現在記録されていないことに言及させていただきます。それでも、ウガンダにおいても慎重に規制措置を徐々に緩和する動きが出てきています。5月26日からは私用車の利用が可能となりました。ただし、乗員は運転手を含め3名までとなっています。同じく、同日からホテルやレストランも客と客の間の距離を保つことを条件に店内での接客も含めて営業可能となっています。なお、これらの規制緩和措置の条件としてすべての市民が外出時にマスクを着用することを義務化しています。マスクの義務化に併せてムセベニ大統領は6歳以上の全国民にウガンダで生産したマスクを6月2日までには配布すると述べました。実際には生産が追いついておらずマスクの配付には時間がかかりそうです。そして、6月4日からはバスやマタトゥ（乗合タクシー）、タクシー等の公共輸送機関も営業が許されました。しかし、この場合も定員の半分までしか乗客を乗せられないこととなっております。学校についても卒業年次の児童生徒の授業再開を6月4日から予定しておりましたが、感染対策が間に合わないとして1ヶ月先延ばしになりました。なお、旅客に対する国境閉鎖及び夜間外出禁止措置は継続しております。

そういう訳で、私は依然日本での滞在を余儀なくされております。そのため、今回のカンパラ通信では、規制緩和の下でウガンダの状況が今どうなっているかを前回もレポートしていただいたムカサ衛（まもる）さんにインタビューの形式で教えてもらうことにいたし

ました。インタビューの実施時期は6月の第2週です。ですので6月第2週目のウガンダの市民がどのように日々を過ごしているか一緒に覗いてみませんか。そして、ムカサさん、インタビューにお付き合いいただきありがとうございました。

Q：ウガンダではロックダウンが開始されてから2ヶ月半が過ぎましたね。そんな中でも厳しかった規制も少しずつ和らげる方向で動いてきているようですね。5月18日の演説でムセベニ大統領は5月26日から私用車の利用を許可し、ホテルやレストランの営業も許されるようになったとそうですね。また、マタトゥ（乗合タクシー）も6月4日から営業を許可すると発表しましたが、カンパラの街は活気づきましたか。

A：5月26日に私用車の利用が解禁されたと同時に、冬眠から覚めたかのように人々が一気にカンパラに出て行きました。仕事に向かう人や気晴らしに外出する人、街の様子を見に行く人などで溢れ、カフェやレストランで食事をする人も増えました。人の動きや車の数などは今ではほぼ通常という印象です。6月4日はバスやマタトゥの営業再開日で道端には市内への足を待つ人が多く見られました。しかし新たにマタトゥは登録が義務づけられルート化されるという規制が設けられました。もちろんこの登録作業は容易には進んでいないので、今も営業できていないものが大半です。マタトゥにおいては好き放題でめちゃくちゃな状態だったのでコロナ禍を利用して新たな規制を設けるのはいい案かもしれません。



(規制緩和後のカンパラ市街の交差点風景)

Q：渋滞の方や空気汚染も一緒に戻ってきましたか。

A：私用車利用が解禁されたと同時にあちこちでひどい渋滞が発生しました。いくつかの規制は緩和されましたが、夜間外出禁止令は継続中です。早めに帰宅の途についても予想外の渋滞に巻き込まれ門限の夜7時までに帰宅できない人が続出し、私用車利用が解禁された初日は多くの人が逮捕され車を警察に没収されることになりました。現在2週間が経

ちましたが市内の渋滞は和らぐことなく、議会では夜間外出禁止令の門限又は勤務時間を短縮する案が議論されています。大気汚染は、嬉しいことに規制の影響でカンパラでも大きく改善したことが数字で表されています。カンパラ近辺の大気汚染に最も影響している車両と未舗装の道路がまき散らす土埃が一気に減少したためですが、車両が動き出したので大気汚染も残念ながら戻ってくることでしょう。現在、ウガンダ環境局はカンパラ市当局とともに規制緩和後のカンパラ及び国全体の空気質の基準を保つため新たな計画をしているそうです。交通機関網の改善や道路の整備、また緑地を増やすなどが検討されているそうです。これもコロナによる規制がもたらしたプラスの動きですね。

Q：そういえば、新規感染者は5月後半に隣国との貨物輸送を担うトラックの運転手に見られ、これがウガンダの累積感染者を600人以上に押し上げていますね。しかし、6月に入ってから既に感染した人との何らかの接触で感染する人が郡部でも目立ってきたように思いますが、市民の間でも不安要因になっていませんか。

A：地方ではカンパラや他県から帰ってきた人は危険人物として見られ、村や町の対策本部に通知され隔離対象とされます。見慣れない人が来た場合も同様に地域住民が怪しい人物がいると通知し検査の対象となるようです。首都圏よりも地方の人々の方が敏感に反応しているようです。

Q：それにしてもいまだにウガンダでは新型コロナウイルス感染での死亡者が記録されておりませんね。サブサハラ・アフリカではそもそも年齢層が若い人中心だから、ということも言われています。この死亡者が出ていないというあたりはウガンダ国内ではどういう理由が挙げられていますか。

A：温暖な気候や免疫力の高さが寄与しているという意見があります。欧米諸国やアジア圏との接触がないアフリカ系の人にはコロナに対する免疫が強く、仮に感染しても致命的ではないのではという説が人々の間でささやかにはじめました。感染症に対する知識や経験値が高いこともプラスになっています。実際にコロナウィルスの最中でもカラモジャ地域（ウガンダの北東地域）ではコレラが流行していますし、マラリアや結核は常に脅威となっています。医療従事者も市民も感染症対策への意識が高いのだと思います。温暖な気候や免疫力の高さで言えば死亡者の出ている隣国ケニアやタンザニアも同じだと思いますが、ウガンダに限りなぜ死亡者が出ていないのかを知人に聞いてみたら、果物や野菜が豊富で日常的に摂取しているので栄養バランスがとれているためだという意見でした。一理あるなと思いつつも他には？と聞いてみたら…ウガンダは神に愛されているからだ、と期待を裏切らない回答をもらいました。

Q：宗教関連や冠婚葬祭を含む集会は引き続き禁止されているウガンダですが、6月3日はウガンダ内外のキリスト教信者にとって大事な「殉教者の日」でしたが（詳しくはカンパラ通信第33回

をご覧ください。)、3日当日は人数も制限した質素な記念集会は開かれたと思うのですが、どんな感じで実施されたのでしょうか。

A：今年の殉教者の日はカトリック殉教者教会、英国教会ともに60人ほどのみを招待しての小さな集会となりました。毎年盛大に行われる式典の前例のない事態にウガンダ・カトリック教会は”今年の「殉教者の日」記念式典はCovid-19の世界的大流行により中止するという歴史的かつ重要な決定をした”と発表しました。当日はロックダウンですっかりおなじみになったテレビを介しての生放送ミサに自宅からの参加です。ミサを主宰したカンパラ大司教は「今年はコロナウィルスに加え洪水やイナゴの群れへの侵入によって打撃を受けました。最前線で活躍する医療従事者、洪水の犠牲者、そしてバッタの侵入により作物を失った人々へ祈りを捧げます」と繰り返しました。



(ごく限られて招待されたミサの参加者) (教会の敷地外でお祈りをささげる人々)

Q：礼拝やミサも禁止されていますが、例年は6月3日めがけて国内外から巡礼者が遠く地方から歩いてカンパラまでやってくる人が目につくのですが、本年はそのような巡礼者はいたのでしょうか。それとも巡礼しようとしても警察に止められたりしたのでしょうか。

A：今年は巡礼者がいたという話を耳にしませんでしたが、もう何年も欠かさずに殉教者の日に殉教者教会内にある聖なる水を汲んでいるという男性が教会のゲートで門前払いされている様子をテレビで見ました。敷地の外にはマットを敷いてミサに参加する人の姿もありましたが、彼らがどこから歩いてやってきたのか気になります。

Q：ところで学校は6月4日から卒業年次の学年だけ授業が再開する予定でしたが、感染対策が取れないということで1ヶ月延期したようですね。休校期間が長期に継続していますが、学齢の児童・生徒はどのように毎日を過ごしているのでしょうか。

A：幼稚園年長の息子は学校のオンラインポータルに毎週アップロードされる課題を日々こなしています。ウガンダでは幼稚園とはいえ小学生並みにしっかり勉強をさせるのが一般的なので、休校中のこの期間は大きなロスになると考えているようです。勉強だけでは飽きてしまう年齢なので、そこはしっかり工作や運動の課題を交えつつ工夫をしてくれています。先生方と生徒の休養期間として課題なしの週もあります。先生方がSNSでグループを作ってくれ父兄と連絡を取り合うなど細かなフォローもしてくれています。学校再開の目処がなく皆が慣れないことで不安を抱える中、こうした心遣いには感謝しています。そして我が家には卒業年次にあたる小学7年生の家族も一緒に暮らしています。全寮制の学校にいますが今回の休校措置で3月から帰宅しています。カンパラ通信第23回でも紹介されていたように、教育熱心なウガンダでは小学7年生は全国一斉卒業試験に向けてラストスパートをかける重要な年です。テレビの各局で卒業年時生向けのレッスンが放送されるため、1日に3レッスンほどテレビの前で勉強しています。都市部はテレビやオンラインへのアクセスがありますが、地方にいる生徒はそれらのアクセスがないため教育省は卒業年次生向けに教材を配布したようです。

Q：ところで、ムカサさん自身の生活は4月上旬の規制が厳しかった頃に比べてどのように変化しましたか。ご主人やお子様はどうですか、何か顕著な変化は見られましたか。

A：規制が緩やかになりましたが、私たち家族の生活は今のところ大きく変わっていません。我が家の徒歩圏内にはスーパーなどの買物をできる場所がないので車で街に出れるようになったことについては安心してはいますが、渋滞ポイントをいくつも通過しなければいけないことを考えると足取りが重くなってしまいます。感染者数もカンパラ近郊で増加しているのでまだ安心もできず外出は週一度ほどに止めています。個人的にとっても嬉しく思っていることと言えば夫と息子の距離が縮まったことです。365日休みがなく家にいても常に電話が鳴っていたのが、この規制期間は比較的のんびりとしていました。息子にとっては厳格な甘えづらいお父さんだったのが（私が受けていた印象です）、一緒にサッカーで遊んだり野菜を育て学校の課題を見てくれるお父さんになったからです。この変化を見れたことが純粋に嬉しかったです。今後こんなにまとまった期間を家族一緒に過ごすことはなかなかないと思うので、規制期間が私たち家族にくれた思い出です。非日常は思わぬ効果をもたらしてくれると感じた出来事でした。

Q：これらの規制緩和を行う条件として外出時は常時マスクを着用することが義務付けられているようですが、その一方マスク自体がなかなか入手しづらいとも伺っています。カンパラの市民は外出時にマスクを着用していますか。地方はどうでしょうか、わかる範囲内で結構ですが。

A：カンパラでのマスク着用率は上がっています。私用車運転中もマスクを着用することが条件ですが、実際着用している人は少なくバックミラーにマスクをぶら下げたり、会話をしている時にはマスクを外してしまう人がほとんどです。私たち日本人のようにマスクに慣

れていないウガンダの人たちには長時間着用することは窮屈なようです。最近では個人で手作りマスクを作成する人も増え、カンパラ風物詩の渋滞中も様々な種類のマスクを売り歩く人が増えました。保健省は二重構造の布製マスクを推奨していますがそれらのマスクが推奨基準を満たしているものかは不明です。地方ではカンパラほどではありませんが手作りマスクを着用する人が増えているそうです。特に銀行や商店、タクシーパークに行く際には注意して着用しているそうです。



(マスクを着用するカンパラ市民)

Q：食糧その他日用品の入手で困っていることはありませんか。規制が緩和される中で最近の方が楽になってきましたか。いろいろな物の供給をケニアに頼らざるを得ないウガンダですが、物価の方はどうですか。ガソリン不足はないですか。ガソリン価格はどうですか。

A：規制緩和後の食糧・物資の入手状況にあまり変化は感じていません。規制がはじまった当初は皆が食糧を備蓄しようとしたため物価が一時上がりましたが、二ヶ月ほど経った現在も食糧価格は以前とあまり変わらず、野菜や卵などは通常時よりも値段が下がりました。農業分野は規制中も活動することが許可されていたことと、都市部に住む人の多くが地方の村に帰って行き農業に従事したことで今後豊作が見込まれるという話も聞きます。ガソリンについては車両使用が禁じられていたため需要が急増することはなく、貨物トラックの国境をまたいだ往来もできていたため価格に大きな変化はありませんでした。ガソリン不足も発生していません。

Q：最後に、今回コロナウィルス感染という危機的な経験をしたことで、ウガンダ人やウガンダ社会全体が不可逆的に変わっていきそうな敬拝は感じられますか。もしそうならどんな点がそうだと感じられますか。

A：今回の状況で外からの支援が限られていることで現地企業が活発に動き出しました。国内で不足品を補おうと国産のマスクや人工呼吸器、ウィルステストキットなどを製造するようになりました。使用済みペットボトルを再利用しフェイスシールドを作り出した若

者集団もいます。SNSが大好きなウガンダ人の間でフェイクニュースに気をつけようという呼びかけが増えました。ソーシャルディスタンスは文化的規範からウガンダでは働かないようです。

世界的なウィルスの大流行という危機的な状況を経験していますが、ウガンダの人々はとても落ち着いています。それは暴動や自然災害、疫病などの日常を脅かす出来事があり、その都度対応してきたことがあるのではないのでしょうか。隣人を助け共に暮らすという習慣もコロナによる規制期間ではプラスに働いたようです。海外から心配されていたコロナによるアフリカでの暴動や飢餓などは今のところ起こる様子はなく、小言を言いながらも抵抗することなく人々はいつものようにこの事態をしのいでいます。そのような経験をしてきた彼らにとって、コロナウィルスの流行は新種の未知のウィルスとはいえ新しいものではなかったのかもしれませんが。ウガンダ人の強さや優しさをあらためて感じているこの頃です。

(了)